



写真1 小林遺跡の方形周溝墓

ふるさと御所

文化財探訪

其の十三

古墳時代〈1〉

弥生墳墓から
古墳へ

生涯学習課文化財係

☎内線696

近畿地方における弥生時代の墓として代表的なものは、方形周溝墓といわれるものです。これは通常、一辺5〜7m程度の方形に溝を掘り、内部に複数の木棺を納めるもので、市内でも小林遺跡ほかで弥生中期のものが見つかっています（写真1）。

方形周溝墓としてとりわけ大きいのはやはり弥生中期の大阪市加美遺跡Y1号墓で、長辺26m、短辺15m、高さ3mあります。墳丘には23基に及ぶ木棺が納められましたが、特に中央の木棺は二重構造で、木槨墓（中国大陸に起源を持つ）と呼ばれるものでした。

やがて弥生時代後期になると、さらに大きな墳丘をもつものが各地に登場します。岡山県総社市の榎築墳丘墓では直径40m強の円形墳丘の両側に細長い張り出し部が設けられました。やはり木槨墓を中心主体としますが、加美遺跡Y1号方形周溝墓などの大きな違いは、たった1人の首長のためにこれだけの規模の墓を造り始めたことです。また、墳丘上に立て並べられた特殊器台・特殊壺と呼ばれる大形の土器は、後の古墳に樹立される埴輪の起源となりました。

古墳時代を特徴づける前方後円形の墳墓の起源は四国の瀬戸内沿岸にあり、徳島県鳴門市秋原1号墓（墳長27m）、香川県高松市鶴尾神社4号墓（墳長36m）は円丘の片側にのみ細い突出部の取り付く弥生終末期の墳丘墓です。この突出部は通路として使用されたと考えられ、円丘と方丘が結合したような形になる前方後円墳の起源問題に決着がついたと評価されています。また、墳丘斜面を石で固める葺石の起源、板石積の石室の天井を石で閉じる竪穴式石室の起源もこの地域にあります。

同じ頃、桜井市纏向遺跡の一角に、円丘の片側に短い突出部の付く特徴的な墳丘墓が現れます。うち、ホケノ山墳丘墓（墳長78m）（写真2）の中心主体は右記した萩原1号墓と同様、石で囲った木槨墓でした。そして墳長278mと、従来の弥生墳丘



写真3 箸墓古墳
写真提供・掲載許可：
桜井市教育委員会

墓からは隔絶した規模で、やはり纏向遺跡の一角に登場するのが最初の古墳である箸墓古墳（写真3）です。3世紀後半の築造とみられ、邪馬台国の女王、卑弥呼の死が魏の正始八年（247年）を前後する頃ですから、死後に築造を始めたと考えれば、この古墳を卑弥呼の墓とみても矛盾ありません。また前述のように、前方後円墳という墳形をはじめ、葺石、竪穴式石室、特殊器台・特殊壺（埴輪の起源）といった東部瀬戸内ほか、西日本各地に起源をもつさまざまな要素が結合した形で最初の古墳が出現することは、魏志倭人伝の「共に一女子を立てて王となす名付けて卑弥呼という」との記事、つまり卑弥呼はさまざまな勢力により共立された、とあることを思い起こさせます。



写真2 ホケノ山墳丘墓
転載許可：奈良県立橿原考古学研究所



4月中旬、柏原市内の人權ふるさと公園内の一部分がご覧のとおり、シバザクラできれいに飾られています。地元の有志の方が整備して植えてくださったそうです。来年の同じころには、今年以上に茂り、一面鮮やかなピンク一色になっていることでしょう。（久）

編集後記